

岩手県の中学生とウール製品 衣生活における「購入・手入れ・廃棄」

渡瀬典子*

(2018年2月14日受理)

Noriko WATASE

Junior High school Students in Iwate and Woolens:
“Purchase, Care and Disposal” in their Clothing Life

I はじめに

1 岩手県とウール製品

中学校の技術・家庭科(家庭分野)において獣毛から組成された衣料品に関する事項は、衣生活の学習内容において主要な学習事項として教科書・授業実践等で扱われてきた。日本は牧畜にはあまり適さない多湿な気候であるが、欧米から毛織物の産業が明治期に導入された後、獣毛の中でも羊毛=ウールは、日本人にとって馴染み深い素材になっている。そこで、本研究は毛織物の中でも「ウール製品」に着目して考察を進める。

岩手県は、毛織物産業が盛んだったアイルランドやスコットランドの気候に近い地域の一つとして、北海道、長野等とともに綿羊飼育やホームスパン産業が政府によって振興された。「ホームスパン」とは一般的には「羊毛を染色して、手で紡いで糸にし、それを手織りしたもの」を指す(現在は、太い紡毛糸を用いた厚手の織物も含めてホームスパンと呼称されることもある)。

第二次大戦後の物資不足を経て、戦後、織物の大量生産化・機械化が推進される中、ホームスパン産業は効率性や生産性の面から各地で廃れていったが、岩手県では、県央地域周辺を中心に現

在も県内数か所に工房が残存し、その生産量は全国の8割を占める¹⁾。また、寒冷的な生活環境にある岩手県において、ウール製品に関する学習は、冬季に「暖かく過ごす」重要な手立てとして地域課題解決にも直結するものであった。ウール製品に関する学習内容には、より暖かく着装するための工夫のほか、手入れの方法(洗濯等)、毛糸を用いた製作(編物、織物)など多岐に渡る。それでは、実際にどのような学習内容がこれまで扱われてきたのだろうか。

2 中学校技術・家庭科(家庭分野)における「ウール製品」関連事項の扱い

中学校の技術・家庭科(家庭分野)では、教科成立以降、ウール製品に関する内容が被服管理の学習で取り上げられてきた。例えば毛織物の「洗濯による収縮性」が学習内容に位置づけられている。岩手県中学校技術・家庭科教育研究会の実践報告集を見ると、「寒冷地である本県の特徴から毛製品の着装は重要な学習事項」だと言及されている²⁾。また、同報告集に記録された授業実践を見ると、「毛製品の手入れ(洗濯)を失敗しないこと」を学習目標とする授業が1970年~80年代頃に多く報告されており、ウール製品の洗濯に関する

*岩手大学教育学部

学習は中学生にとって身近で重要なものだったといえる。この時代は、被服製作のなかで「編み物」が教材に挙げられていたことから³⁾、羊毛の材料特性、製作、手入を単元化することができ、生徒が課題に取り組みやすい状況だったと推察される。

しかし、現行の中学校学習指導要領では、羊毛を用いた織物・編物製作実習の記述がなくなったこと、授業時数が減り、製作の時間が確保しにくくなったことから、中学校の家庭科の授業では毛糸を用いた製作＝編物（手編み、機械編み）、織物はあまり行われていない⁴⁾。以前の中学校技術・家庭科で学習されていた編物、織物に関する内容は、高等学校家庭科の選択科目「服飾デザイン」に移行し「刺しゅう、編物、染色、織物、その他の手芸など」について「地域の伝統文化なども関連付けて」扱うこととされている。以上の状況から、現代の中学生にとって「ウール製品」に関する学習は「創作するもの」という位置づけよりも、製品として「消費するもの」、という意味合いが大きい。また、被服製品の供給状況・マシンウォッシュブルニットを可能にした繊維加工技術の進歩はもとより、ライフスタイルの変容に伴い、我々とウール製品との付き合い方にも変化が生じている。そこで、本研究は現代の中学生が日常生活において、どのようにウール製品を扱い、活用しているかを「購入・手入れ・廃棄」のプロセスから明らかにする。この結果を踏まえ、今後の技術・家庭科（家庭分野）における教材研究の一助とすることが本研究の目的である。

II 研究方法

1 分析対象資料

本研究では、日本家庭科教育学会東北支部会が1985（昭和60）年に東北6県の小・中・高等学校で実施した「家庭生活に関する認識調査（以下、「認識調査」または「1985年調査」と記載）」結果の一部を用いる。使用データは設問項目「服を

買うときに選ぶ人」、「洗濯の実施状況」、「ウール製品の取り扱い」に関する「中学校2年生」の男女生徒570名（男子288、女子282）の回答である（岩手県の回答数は100）。

2 調査方法

「認識調査」で用いた設問について「洗濯」に関する学習を終えた岩手県のA中学校1年生152名を対象に、質問紙調査を実施した。有効回答数は150（男子72名、女子78名、有効回答率98.7%）だった。なお、調査対象校であるA中学校は1985年の「認識調査」対象校と同じ中学校である。調査時期は2016年2月、調査方法は集団自記式による。調査内容は、「認識調査」で抽出した設問項目の他に、「着なくなったウール製品の扱い」、「ホームスパン産業の認知状況」を設定した。

III 調査結果

1 誰が服を選んでいるか

はじめに、衣服購入の際、中学生がどの程度意思決定に関わっているかを明らかにするため、「あなたがふだん着る服を買うときにそれを選ぶのは主に誰ですか」という問いを設定した。図1-1、1-2は、1985年の調査と2016年調査との比較を男女ごとに示したものであり、各々の調査結果について独立性の検定を行った。図1-1が示すように、1985年調査の男子生徒の状況は「自分と母」が半数近くを占めたが、2016年調査では、この項目の選択率が著しく低下し、「自分で」選ぶという回答が増加した（ $p < .01$ ）。ところが、女子の結果を見ると、1985年調査では4割以上の生徒が「自分で」選んでいたのに対し、2016年調査では10ポイント程度減少し、「母親」に選んでもらうという回答が大幅に増え、回答傾向に男女差が見られた。一方、男女共通に見られた変化は、「自分と友達」という項目を選ばなくなったことであり、とくに女子では回答率が大幅に減少した。

以上の結果から、男子中学生が「(自らの)服を選ぶ」意思決定に積極的に関与するようになって

たこと、女子中学生が服を購入する際、母親にその選択権を委ねる状況が見られるようになったことが明らかとなった。この変化は女生徒が母親の

服選びのセンスに信頼をおくようになったためか、あるいは自分自身で選ばない（選べない）からなのかは、再検証する必要がある。

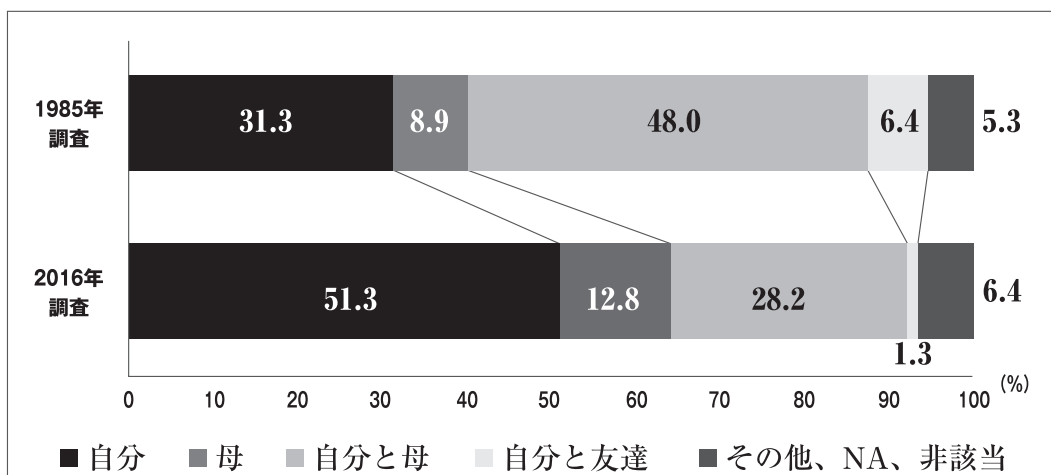


図 1-1 「服を主に選ぶ人」(男子)

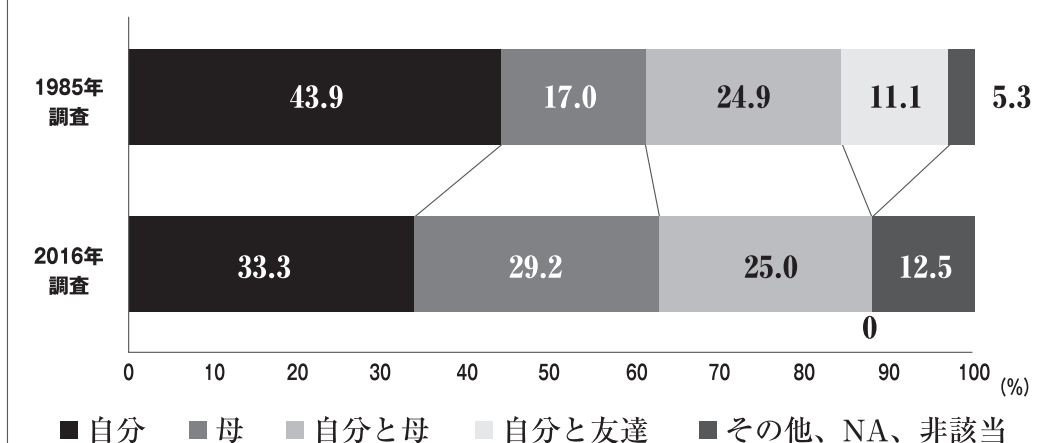


図 1-2 「服を主に選ぶ人」(女子)

2 中学生はウール製のセーターを着ているのか？

冒頭に述べたように、岩手県の中学生にとってウール製品は身近な衣料品だと考えられる。それでは、現代の中学生は実際にウール製のセーターを日常的に着用しているのだろうか。そこで、ウール製のセーターの着用状況について4件法（よく着る・ときどき着る・あまり着ない・全く着ない）で調査を実施した。また、ウール製品に代わるものとして多く流通している「フリース素材」の服

の着用状況についても同じく4件法で質問をした。

2016年調査は4月に実施したため、寒い時期ではあるが、中学生のウール製セーター着用機会は「よく着る（2.6%）」、「時々着る（28.3%）」両方合わせて3割程度であり、着用機会はあまり多くなかった（図 2 - 1）。一方、「フリース素材」の服の着用状況は、「よく着る（16.4%）」、「時々着る（44.1%）」でウール製セーターよりも着用機会が多い結果だった（図 2 - 2）。設問の文章

が「セーター」に限定されていたため、ウール製品を「着る」という回答が伸びなかったかもしれないが、様々な素材が開発される中で「暖かさ」を提供する衣服がウール製品だけではなくってきた、すなわち衣服選択の多様化が推察される。それでは、衣料品の選択肢が広がったこと以外に、ウール製の衣服があまり選択されなくなった背景には、一体何があるのだろうか。そこで、本研究

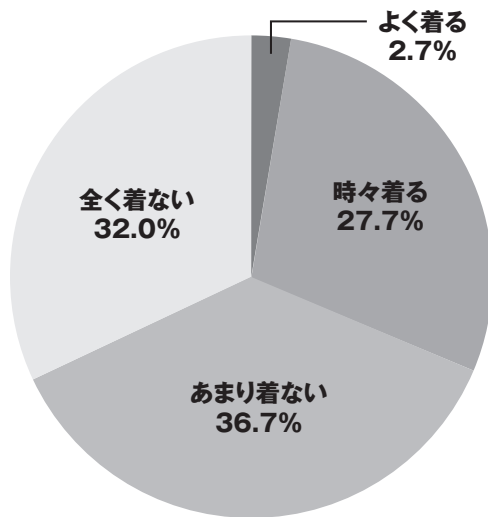


図 2-1 ウール製セーターの着用状況 (N=150)

は技術・家庭科（家庭分野）の学習課題でもある、「ウール製品の手入れの難しさ」というイメージが起因するのではないかと推察し、中学生の現状を探ることにした。

3 「ウール製品の手入れ」の経験と知識

はじめに、調査対象者である中学生が洗濯全般にかかわる事柄を普段の生活でどの程度やっ

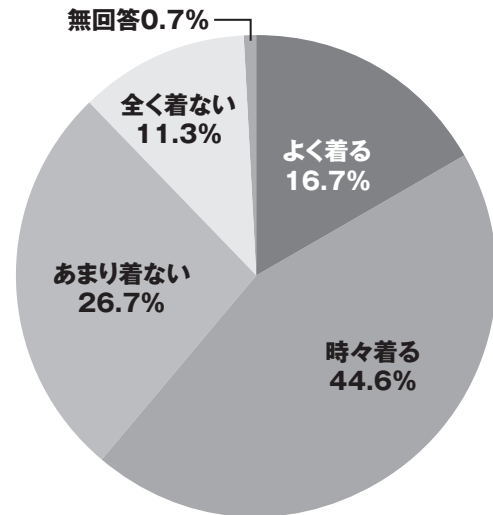


図 2-2 「フリース素材」の服の着用状況 (N=150)

るのかを明らかにすることにした。調査項目は「自分の洗濯物」を「手で洗う」、「洗濯機で洗う」、「干す」、「乾いたものを取り込む」、「たたむ」、さらに「(乾いた洗濯物を) 家族ごとに分ける」について、「よくする」、「することがある」、「しない」のいずれか1つを選ぶ形式にして、回答を得た。その結果が表1である(網掛け箇所は最も回答が多かった項目)。「よくする」の回答率が最も高かったのは「洗濯物をたたむ」で、次いで「乾いたものを取り込む」だった。反対に実施率が低かったのは「手で洗う」で、「よくする」という回答は1割にも満たなかった。

次に、「(毛100%) セーターを洗ったことがあるか」質問したところ、女子の2割程度が「ある」と回答したが、男子は1割に満たない状況だった(図3-1)。調査対象者全体で換算すると15.9%であり、この結果から多くの生徒がウール製品を洗濯したことがないことがわかる。

1985年調査では「(毛100%) セーターの洗濯方法」について、「手洗い・ぬるま湯・すすぎは2,3回・日陰に干す」のが「正しい方法」として生徒の回答結果を分析している。これは当時の「技術・家庭科」被服Ⅱの学習内容に基づく。調査では、「(毛100%) セーターの洗濯方法」を「手洗い」、「洗濯機」、「その他」、「わからない」のいずれかから選ぶように設定しているが、1985年調査では約7割の生徒が「手洗い」と回答している(図3-2)。しかし、30年以上を経た現在は「マシンウォッシュャブルニット」の登場や洗剤の品質改良により洗浄の仕方は多様化し、2016年調査では「手洗い」ではなく、「洗濯機で洗う」という回答の方が男女問わず多くなっている。生徒の回答が大きく変化した背景には、2008年頃からファストファッションブランドで低価格かつ大量に販売されるようになった洗濯機で洗えるウール製品の存在が大きい。

「マシンウォッシュブル」を可能にしたのは、①羊毛のスケールを樹脂で覆う、②スケールの除去、③毛玉がつきにくくなる特性がある「マイクロ抗ビルアクリル」といった化繊との混紡、に代表される加工によるものであり、毛繊維が縮絨を起こさない（縮んだり、型崩れしたりしない）処理があらかじめ施されている。図3-3は、1985年調査で「正答」とされた項目を全て選択した生徒の割合である。1985年調査では女子の半数、男子の1/3が「(毛100%)セーターの洗濯方法」を理解している、とまとめられているが、2016年の中学生の回答をみると、男女ともに「正答」とされた項目の選択率が低い。先述したように、現代では洗濯機で洗うことができるウール製品も出てきているため、洗濯方法の問いにおいて回答が分かれることは否めないが、「水温・すすぎ回数・干し方」の部分については、現在もほぼ一般的な方法として捉えることができる。そこで、洗濯方

法以外の問いについてみたところ、「干し方」では「陰干し(34.7%)」よりも、「日のあたるところに干す」の選択肢の方を選ぶ生徒が多く見られた(44.0%)。生徒の考え方としては、脱水しにくいウール製品の水分を早く除去するために、日向が有効、と捉えたと思われるが、製品の劣化や日焼け・黄変防止のために、直射日光を避けた「陰干し」が推奨されている。

生徒の全体的な回答傾向を見ると、「わからない」という項目が選択されることが多かった。とくに「洗濯方法」は48.0%、「すすぎ回数」は40.0%で、それ以外の問いも2割程度の生徒が「わからない」を選んでいた。このことは、ウール製品の手入れ方法が生徒の日常生活の経験から推論が及ばない状況を物語るものとも考えられる。

4. ウール製品の廃棄と再利用

中学生のウール製品の廃棄と再利用の現状について明らかにするため、「着なくなったウール製

表1 洗濯に関する事柄の実施状況 (N=150)

	n(%)			
	よくする	することがある	しない	無回答
手で洗う	11 (7.3)	57 (38.0)	79 (52.7)	3 (2.0)
洗濯機で洗う	28 (18.7)	45 (30.0)	74 (49.3)	3 (2.0)
洗濯物を干す	27 (18.0)	70 (46.7)	53 (35.3)	0
乾いたものを取り込む	33 (22.0)	67 (44.7)	50 (33.3)	0
家族の洗濯もの分ける	25 (16.7)	53 (35.3)	72 (48.0)	0
洗濯ものをたたむ	51 (34.0)	66 (44.0)	33 (22.0)	0

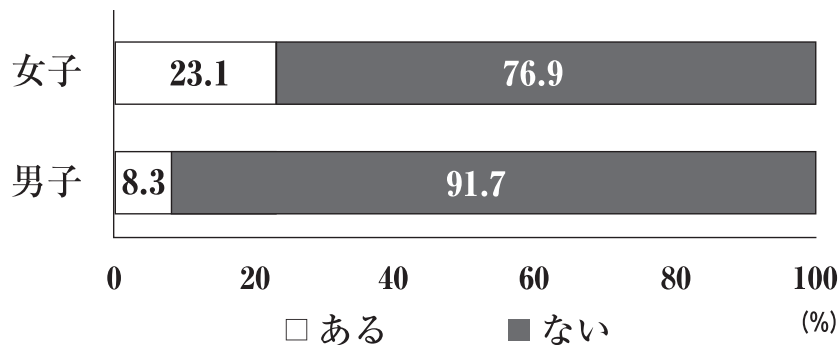


図 3-1 セーターの洗濯経験

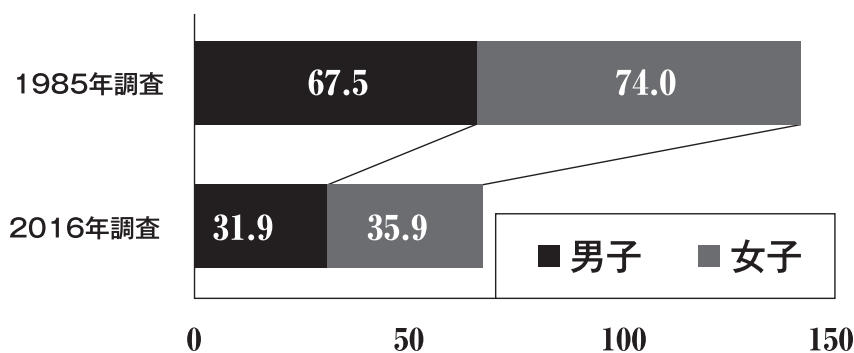


図 3-2 「セーターの洗濯方法は手洗い」と回答した割合

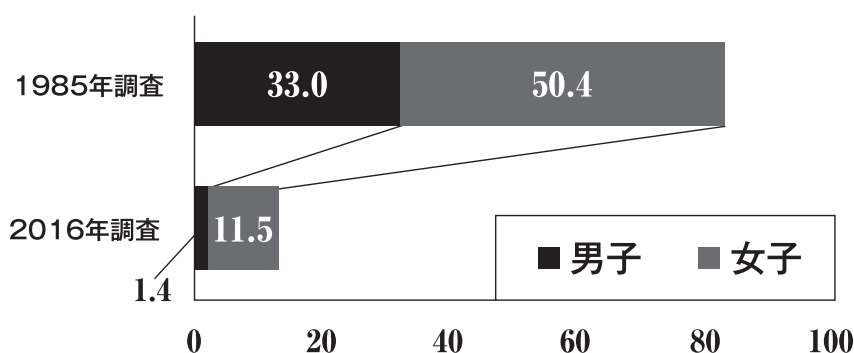


図 3-3 1985年基準で「正解」とされた項目をすべて選択した割合

品の服（セーターやカーディガンなど）をどのようにしていますか」という質問をした。選択肢は「他の人にあげる（譲渡）」、「別のものに作り直してもらう（再利用）」、「自分で別の物に作り直す（再利用）」、「とりあえず置いておく（とっておく）（判断留保）」、「捨てる（廃棄）」、「その他」、「わからない」の7項目である（複数回答）。最も回答が多かったのが「他の人にあげる（譲渡）」で35.1%、次に「とっておく（判断留保）」が続いた（24.5%）。「捨てる（廃棄）」を選んだ回答は2割だった。自分で作り直したり（1.9%）、他の人に作り直してもらったりする（3.8%）などの「再利用」は少数だったが、何とか製品を活用したいという中学生の意識が垣間見える。この結果から、ウール製品に対する有効な手段としての再資源化・活用のほか、衣料製造の問題（過供給と労働問題）の課題化につながる教材開発をさらに充実させることが急務といえる。

5. 「ホームスパン」の認知度

岩手県の地場産品である「ホームスパン」製品は、岩手県内のデパート、小売店、観光地（小岩井農場まきば園、盛岡手作り村など）で販売されている。また、先述の観光地では織り機を使ったホームスパン体験ができるところもある。そこで、調査対象の中学生にとって、これまでの生活体験のうえで「ホームスパン」という言葉がどのように認知されている／認知されていないかを見るために質問項目を設定した。ここで取り上げる問いは「ホームスパンという言葉を知っていますか」と「ホームスパンという言葉から連想する事柄を書いてください」の2問である。

「ホームスパン」という言葉を「聞いたことがある」と回答した生徒は男子4割、女子5割で、やや女子の方が聞いたことがあるという回答が多く見られた。

次に、「ホームспан」という言葉から連想することを自由回答形式で回答を得た。分析の際に、自由回答記述の内容をアフターコーディングし、記述内容について「ホームспан」本来の意味に「よくあっている」、「まああっている」、「何とも言えない」、「やや違う」、「全く違う」、「わからない」に分類した。表2は先述した「ホームспанという言葉聞いたことがあるか」という問いに対する各生徒の回答結果と、この分類をもとにした自由回答記述との関連を表したものである。「よくあっている」の回答例は「毛糸、みちのくあかね会」など、具体的なキーワードが挙げられているものを選んだ。「まああっている」に分類したのは、「盛

岡ブランド」など、社会科や総合的な学習の時間で学習したと思われる語や「布」「手作りのもの」など間接的に関連する語を1つだけ挙げている場合とした。

最も多く回答されていた説明事項は、言葉の響きが影響したのか、「家でパンを作る」だった。この回答は「全く違う」のカテゴリーに当てはまる。はっきりと「わからない・知らない」と記入された回答と無回答（空欄）は項目を分けて表中に分類した。

表2に表れるように、「ホームспанという言葉聞いたことがある」、しかも「よくあっている」というカテゴリーに入る回答をした生徒は全体の

表2 「ホームспан」という言葉聞いたことがある×連想する語彙との適合状況 (N=150)
n(%)

適合度	言葉を聞いた経験の有無	
	ある	ない
よくあっている	17 (11.3)	0
まああっている	25 (16.7)	0
何とも言えない	1 (0.7)	0
やや違う	1 (0.7)	1 (0.7)
全く違う	16 (10.7)	48 (32.0)
わからない	6 (4.0)	7 (4.7)
記入なし	5 (3.3)	23 (15.3)

11.3%だった。「ホームспанという言葉聞いたことがある」という回答をして、適合度が「やや違う」、「全く違う」、「わからない」、「記入なし」に分類された生徒は全体の35.4%を占め、「言葉として聞いたことはあるけれど意味をよくつかんでいない、表現できていない」状況だった。新しい学習指導要領では、地域社会の生活文化や産業について理解を深め、日常生活に活かす力の育成を重視している。岩手県における貴重な産業としてホームспанを見つめ直し、ウール製品の特質等に関する教材のヒントとなることが今後求められるといえよう。

VI まとめ

岩手県では、ホームспан産業や中学校技術・家庭科研究会の授業実践事例等、ウール製品は近現代において身近なものであった。しかし、衣料品や消費者の嗜好の変化によって、ウール製品の購入・手入れ・廃棄は日々変容している。そこで、本研究は中学生を対象にした調査を通して、彼らのウール製品の活用状況を探り、今後の中学校技術・家庭科（家庭分野）の教材研究に資する基礎データを得ることを目的に置いた。

中学生の日常生活における着装状況では、ウール素材の服よりもフリース素材の服をよく着る、という回答が多く「セーターを洗ったことがある」という回答は全体で15.9% だった。「マシンウォッシュابل」製品が増えてきた現状から、「手洗い」という回答が1985年調査に比べて減少したが、洗い方が「わからない」という回答も多く見られた。よって、中学生は「ウール製品はあまり着ないし、手入れも難しそう」と捉える状況が調査結果から示唆された。「着なくなったウール製セーターの扱い（複数回答）」で、最も多かったのは「他の人にあげる」だったが、「とりあえず置いておく（とっておく）」という回答も多く、中学生には「衣服の分別」機会にあまり直面せず、判断留保している状況も見えた。「作り直す（再利用）」という回答は全体の1割に満たなかったことから、ニット製品の「編み返す」という長所は現代の中学生にとっては身近ではないことが明らかとなった。中学校段階では、ウール製品の被服管理は重要な学習内容として扱われてきたが、中学生の現実の生活と製品の技術革新を踏まえた教材解釈や、消費生活と環境の視点を交えた教材研究が必要であることが改めて浮き彫りとなった。

岩手県の地場産業である「ホームスパン」は、調査対象の中学生では、約半数が「聞いたことがある」と捉えていたが、正確にイメージできていた生徒は1割程度だった。「ホームスパン」は本来、大量生産ではなく、小規模の生産者が羊毛を「染める・つむぐ・織る」一連の作業をすることを指す。ウール製品の管理に関する学習は被服材料、洗剤の性能改善に伴い、日々更新する内容を含む。木村はウール製品の手入れに関する学習は実習・実験が必要であり、「根拠をもった」学びが必要だという⁵⁾。その点で、ホームスパンの技法を効果的に取り入れて授業の中で展開することで、学習が深まると考えられるが、大人数の学級で実践する場合には、段階を踏んだ教材・教具の工夫が不可避である。この点については、今後実践を含めた検証が必要である。実践化に際し、ホームスパンの特性、羊毛製品の材料特性を加味した教材提

案と子どもの発達段階に応じた制作場面における指導・支援について改めて検討したい。

なお、本研究は平成28年度岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業及び科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号:15K00717)の助成を受けたものである。

<引用・参考文献>

- 1) LLP まちの編集室編(2015). 岩手のホームスパン, 101
- 2) 岩手県技術・家庭科教育研究会(2000). 技術・家庭科ってなに? ～教科の本質を追い求め続けた研究実践の軌跡～, 111
- 3) 渡瀬典子(2013). 家庭科教育における「被服製作」はどのように扱われてきたのか. 年報・家庭科教育研究34, 1-12
- 4) 渡瀬典子(2016). 「技術・家庭科」における「手芸」の中の「編み物」教材－「生活技術」の視点から－. 岩手大学教育実践総合センター紀要, No.15, 169-178
- 5) 木村美智子(2016). 被服整理学の研究成果と家庭科教育. 日本家政学会誌67(2), 124-125